３愛防第 19 号
令和３年４月 30 日

各関係機関・団体長　様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、５月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（５月）

令和３年４月 30 日
愛　　媛　　県

１　気象予報（高松地方気象台）
　１か月予報　　４月 22 日発表　（４月 24 日～５月 23 日）
〈 １か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温（１か月）	降水量（１か月）	日照時間（１か月）
四国地方	低 30 並 30 高 40% ほぼ平年並の見込み	少 40 並 40 多 20% 平年並か少ない見込み	少 20 並 40 多 40% 平年並か多い見込み

〈 予報のポイント 〉
　高気圧に覆われやすいため、向こう１か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いでしょ。

２　病害虫の発生予想
水　稲
（１）いもち病（育苗～本田初期）
ア　予報の内容　　発生量：並
イ　予報の根拠
(ｱ) 昨年のいもち病はやや多～多の発生であったことから、種子、わら、籾殻での保菌率はやや多～多いと推察される。
(ｲ) 現在、育苗期や移植後の早期水稲での発病は確認していない。
(ｳ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 健全種子を確保するため塩水選と種子消毒を必ず行う。
(ｲ) 種子消毒にあたっては、薬剤の効果を発揮させるため、①乳剤以外の長時間浸漬では処理中に薬液を攪拌すること、②処理後は風乾し薬剤を十分付着させること、③浸種後２～３日間は水換えしないなど基本事項を遵守する。
(ｳ) 苗いもち対策は、①有効薬剤の播種時処理、②覆土を十分行い播種した籾を露出させない、③育苗中の高温多湿を避ける、④発病の早期発見と薬剤処理による応急防除を実施する。
(ｴ) 本田では窒素質肥料の過用は避ける。
(ｵ) 育苗場所付近に雨ざらしの稲わらや籾殻を放置しない。
(ｶ) 置き苗は、移植後本田での葉いもちの伝染源になるので圃場内外に放置しない。
(ｷ) 常発地や罹病性品種を植え付ける場合には、地域の防除暦に従い、本病に登録のある育苗箱施用剤を必ず処理する。

（２）イネミズゾウムシ
ア　予報の内容　　発生時期：並
イ　予報の根拠
(ｱ) 現在、成虫の発生及び被害は確認していない。
(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされている。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 常発地では、本虫に登録のある育苗箱施用剤を処理する。
(ｲ) 成虫の水田への侵入を防止するため、水田の畦畔際に障壁（あぜなみシート等）を設置する。
(ｳ) 本虫に有効な育苗箱施用剤を処理していない圃場で発生量が多い場合には本田防除を行う。

かんきつ
（１）かいよう病

ア　予報の内容　　発生量：並～やや少
イ　予報の根拠
(ｱ) ２月の伊予柑を対象に行なった越冬病斑の調査では、発生は並である。
(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 夏秋梢などの罹病枝葉を除去し病原菌密度を下げる。
(ｲ) 強風による付傷は発病を助長するので防風垣や防風ネットなどを整備する。
(ｳ) 昨年度の多発園地や発芽前防除の未実施園地では開花前及び落弁期の薬剤防除を徹底する。
(ｴ) 本病に対して感受性の高い品種（‘甘平’等）では防除を徹底する。

（２）そうか病
ア　予報の内容　　発生量：やや多～並
イ　予報の根拠
(ｱ) ３月の越冬病斑の調査では、発病葉率、発病度ともに高い。
(ｲ) 気象予報では、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 発病葉及び枝を除去する。
(ｲ) 多発園地では落弁期の防除を実施する。

（３）ミカンハダニ
ア　予報の内容　　発生量：並
イ　予報の根拠
(ｱ) ４月中旬の調査では、雌成虫の寄生葉率並びに１葉あたりの雌成虫数ともにやや少の発生である。
(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か少ないとされており、発生にはやや助長的である。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 園地内の早期発生樹で１葉当たりの雌成虫数が平均２～３頭に達した場合には防除する。
(ｲ) 冬期の機械油乳剤を散布していない園地では、発生が早まるので注意する。
(ｳ) 薬液は掛けむらのないように丁寧に散布する。

かき
（１）炭疽病
ア　予報の内容　　発生量：やや少～少
イ　予報の根拠
(ｱ) ３月の越冬病斑の調査では、発生はやや少である。
(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か少ないとされており、やや抑制的である。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 園地内をこまめに観察し、越冬病斑がみられる結果母枝や５月下旬頃からみられる新梢の発病枝を早期に除去する。
(ｲ) 昨年、発生の多かった園地では新梢発育期から１～２回防除する。

キウイフルーツ
（１）かいよう病
ア　予報の内容　　発生注意
イ　予報の根拠
(ｱ) ４月中旬の調査（品種ヘイワード）では、葉の発病が昨年より多く認められている。
(ｲ) ４月の強風雨により新梢、新葉の付傷等が多いと推察される。
(ｳ) 気象予報では、降水量は平年並か少ないとされており、発生にはやや抑制的である。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 新梢及び花蕾への重要な感染時期であり、特に強風雨により発病は著しく助長されるため、薬剤防除や防風対策を徹底する。
(ｲ) 園地見廻りによって、葉の斑点、花蕾の腐敗及び枝幹部からの樹液漏出痕や枝枯れ等の症状が確認された場合、周辺への拡散防止のため、発病部の早期除去を行う。
(ｳ) 伐採は、平成 31 年３月改訂の「キウイフルーツかいよう病 Psa3 型の防除方針」に基づき発病程度に応じて適切に対応する。
(ｴ) 開花前の薬剤防除は、コサイド 3000 の 2,000 倍等（薬害軽減のため、炭酸カルシウム剤 200 倍を加用）を使用する。なお、銅水和剤は受粉への影響の恐れがあるため開花期間中の使用を避け

る。
(ｵ) 強風雨後、既発生園や発病園地の近くでは、樹体損傷による感染防止のため、抗生物質剤のアグリマイシン－100 1,000 倍、カスミン液剤 400 倍、アグレプト水和剤 1,000 倍、マイシン 20 水和剤 1,000 倍を応急散布する。

果樹共通

（1）カメムシ類（うめ、もも、キウイフルーツ、なし、すもも、かき、かんきつ等）

ア　予報の内容　　発生量：　やや少

イ　予報の根拠

(ｱ) 県下 40 か所で行った広葉樹落葉中のチャバネアオカメムシの越冬密度調査では、全県での越冬量はやや少なく、越冬確認地点率もやや少であった。

(ｲ) 県下５か所の集合フェロモントラップ調査では、第４半旬まで並の誘殺数である。また、県下９か所の予察灯調査でも誘殺数は並である。

(ｳ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、飛来時期も平年並とみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 今後の発生は、気温の上昇により（平均気温 20℃以上）、越冬成虫（７月頃まで生存）は、ヒノキ球果が成熟するまで、サクラ・キリなど餌植物を移動しながら果樹園へ飛来する。

(ｲ) もも、なしでは早めに袋掛けを終える。

(ｳ) 果樹園への飛来は、曇天で夜温が高い日に多くなるため飛来に注意を払い、飛来が確認されたら防除を行う。

(ｴ) 山林に近い園地での被害が多い傾向にある。越冬密度は低い場合でも局所的に果樹園への飛来が増加する場合があるので注意する。

(ｵ) カメムシ類の防除薬剤の多くは、カイガラムシ類やハダニ類に対してリサージェンス（農薬散布による増殖）が起こりやすいので散布後のカイガラムシ類やハダニ類の発生に注意する。

野　菜

（1）べと病（冬春きゅうり）

ア　予報の内容　　発生量：やや多～並

イ　予報の根拠

(ｱ) ４月中旬の調査では、促成栽培及び半促成栽培ともに発生は多である。

(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。

ウ　防除上の注意

(ｱ) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。

(ｲ) 草勢の低下は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(ｳ) 老化葉はできるだけ除去し、圃場内の通風を図る。伝染源を減少させるため、多発葉を除去する。

(ｴ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏の菌叢までかかるよう丁寧に散布する。また、病勢が進展している場合は、治療効果の高い薬剤を散布する。

（2）褐斑病（冬春きゅうり）

ア　予報の内容　　発生量：少～やや少

イ　予報の根拠

(ｱ) ４月中旬の調査では、促成栽培及び半促成栽培ともに発生は認められていない。

(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。

ウ　防除上の注意

(ｱ) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。

(ｲ) 草勢の低下、窒素質肥料の過用は発病を助長するので適正な肥培管理に努める。

(ｳ) 老化葉はできるだけ除去し圃場内の通風を図る。伝染源を減少させるため多発葉を除去する。

(ｴ) 栽培終了時期を勘案しながら定期防除に努め、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

（3）うどんこ病（冬春いちご）

ア　予報の内容　　発生量：やや少

イ　予報の根拠

(ｱ) ４月中旬の調査では、やや少の発生である。

(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か少ないとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ　防除上の注意

(ｱ) 発病葉や発病果は速やかに除去する。

(ｲ) 薬剤散布に当たっては展着剤を必ず加用し、葉裏や芽の間隙部に薬液が付着するよう丁寧に散布する。
(ｳ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
(ｴ) 栽培終了時には、いちごの株元を切断しハウスを閉め切るなどしてハウス外への胞子飛散を防止する。特に、育苗床に近接するハウスでは注意する。

（4）灰色かび病（冬春トマト、冬春なす、冬春きゅうり、冬春いちご）
ア　予報の内容　　発生量：やや少～少
イ　予報の根拠
(ｱ) ４月中旬の調査では、冬春トマト、冬春いちごで少、冬春なす及び冬春きゅうりで並の発生である。
(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。
ウ　防除上の注意
(ｱ) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。
(ｲ) 過繁茂や軟弱な成育は発病を助長するので、適正な潅水や肥培管理に努める。
発病果や枯死茎葉は早めに除去する。
(ｳ) 発病初期の防除に努める。また、耐性菌の発生を防ぐため、同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション使用を心掛ける。

（5）ハダニ類（冬春いちご）
ア　予報の内容　　発生量：やや多
イ　予報の根拠
(ｱ) ４月中旬の調査では、やや多の発生である。
(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 葉裏を中心に観察し、発生がみられたら早めに防除する。また、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
(ｲ) 薬液が葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
(ｳ) 薬剤散布に当たっては、ミツバチや天敵への影響を考慮して薬剤を選択する。

（6）アザミウマ類（冬春いちご）
ア　予報の内容　　発生量：やや多～多
イ　予報の根拠
(ｱ) ４月中旬の調査では、寄生花率がやや多、１花当たり寄生虫数は多である。
(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 花や幼果の寄生状況を観察し、早期発見による早めの防除が効果的である。
(ｲ) ハウス外部からの成虫の侵入を抑制するため、圃場内の発生に注意する。
(ｳ) 薬剤散布に当たっては、ミツバチや天敵への影響を考慮して薬剤を選択する。

（7）　べと病（たまねぎ）
（令和３年３月 31 日付け　病害虫発生予察注意報（第８号）参照）

ア　予報の内容　　発生量：やや多～多
イ　予報の根拠
(ｱ) ３月中旬の広域調査では、発病圃場率は平年より高かったが、その後も発生程度が高くなっている圃場が認められる。
(ｲ) 気象予報では、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 球の肥大期になると感受性が高まり、葉身に淡黄緑色の楕円形の病斑が出始めるため、圃場観察を徹底し発病初期に治療効果のある薬剤で防除を行う。
(ｲ) 気温が 15℃前後で曇雨天が続くと多発しやすいので防除を徹底する。

（8）　コナガ（春キャベツ）
ア　予報の内容　　発生量：やや多～多
イ　予報の根拠
(ｱ) ４月中旬の調査では、多の発生である。
(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや助長的である。

ウ　防除上の注意
(ｱ) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統剤の連用を避けローテ―ション散布を心掛ける。
(ｲ) 老齢幼虫や蛹には薬剤の効果が不十分なため、早期発見・早期防除に努める。
(ｳ) 薬剤の効果の低下が疑われる場合には、別系統の剤を選択する。なお、フェニックス顆粒水和剤及びプレバソンフロアブル５等のジアミド系薬剤は感受性の低下が認められており使用を控える。
(ｴ) 幼虫は主に葉裏に生息しているため、葉裏まで薬液が掛かるよう丁寧に散布する。
(ｵ) 発生源となるアブラナ科野菜の収穫残渣は速やかにすき込み処分を行い、圃場周辺のアブラナ科雑草の除草に努める。

（９）　ミナミキイロアザミウマ（夏秋きゅうり、夏秋なす）
ア　予報の内容　　発生量：やや多～多
イ　予報の根拠
(ｱ) ４月中旬の調査では、冬春きゅうり及び冬春なすで多の発生であることから、今後温度の上昇とともに施設からの飛び出しが多くなってくる。
(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや助長的である。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 定植まで露地で育苗する場合は、防風ネットによるトンネル被覆を行い成虫の侵入を防ぐ。
(ｲ) 育苗期間中や定植時に本虫に登録のある薬剤を処理する。
(ｳ) 液剤散布では本虫に薬剤が直接かからないステージ（植物組織内の卵、土中の蛹）があるので、早期発見・早期防除に努め、発生を見たら３～７日間隔で２～３回防除する。
(ｴ) 系統の異なる薬剤を選択し、ローテーション散布を心掛ける。
(ｵ) 本虫はメロン黄化えそウイルス（MYSV）を媒介するので注意する。

(10)　ネギアザミウマ（たまねぎ）
ア　予報の内容　　発生量：多
イ　予報の根拠
(ｱ) ４月中旬の調査では、１株当たりの成・幼虫数は 7.2 頭（前月 0.42 頭）と発生密度が高くなっている。
(ｲ) 気象予報では、気温はほぼ平年並、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや助長的である。
ウ　防除上の注意
(ｱ) 食害により葉が白くかすり状となり、多発時には葉全体が白化するのでこれらの症状がある圃場では直ちに防除する。なお、同一系統の薬剤の連用を避けローテーション使用を心掛ける。
(ｲ) 本虫はえそ条斑ウイルス（IYSV）を媒介するので、発生密度が高まらないよう早めに防除する。
(ｳ) 圃場内外の雑草は発生源となるので除草する。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム ＞ 仕事・産業・観光 ＞ 農業 ＞ 鳥獣害・病害虫対策 ＞ 愛媛県病害虫防除所

ホームページアドレスは http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html

【農薬使用時の注意】

◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。

◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。

◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。

◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。

◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。

◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。

◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。

◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。